様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２０００１

研究課題名（和文）相互依存性（ｉｎｔｅｒ－ｄｅｐｅｎｄｅｎｃｙ）の哲学に基づく新たな人格論の構築

研究課題名（英文）Towards a new conceptualization of personhood: From the perspective of philosophy of inter-dependency.

研究代表者
池田　喬（Ikeda, Takashi）

明治大学・文学部・講師

研究者番号：７０５８８８３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、人格であること（personhood）についての私たちの理解を、他者や環境への依存性に着目することで更新することを目指した。現象学、フェミニズム、ケアの倫理、当事者研究などの議論を吟味した結果、とりわけ、人格であることにとっての構成的契機として、個々人の身体ニーズの反映としての住まい（ホーム）の経験が主題化され、その経験の意味が考察された。同時に、その研究によって、自己の同一性の意識などの特定の認知能力によって特徴付ける見方の問題点が明らかになり、その問題の倫理学的・政治哲学的含意の検討がなされた。成果は、日本語・英語・ドイツ語で執筆された諸論文において発表された。

研究成果の概要（英文）：This research project aimed to improve our understanding of the notion of personhood by focusing on people’s dependency on others and material environment. Through critical examinations of philosophy and theories in other fields concerning inter-dependency, I specifically clarified meanings of experience of being-at-home as a constitutive moment for being person and elucidated problems of the popular conception of person that tends to reduce the experience of being person into possession of certain cognitive capacity of individuals such as consciousness of self-identity. The result of the research is made public in academic papers in Japanese, English, and German.

研究分野：哲学・倫理学

キーワード：自立と依存　ケア　フェミニズム　現象学　人格　住まい（ホーム）　当事者研究

１．研究開始当初の背景

申請者は、研究開始以前、ハイデガーを中心とする現象学の研究に従事し、自己統御能力に依拠した行為者・人格概念を批判してきた。同時に、東京大学グローバル COE「共生のための国際哲学教育研究センター（UTCP）」で月例研究会「コミュニケーションとリハビリテーションの現象学」を企画運営し、障碍当事者や研究者と共同研究する中で、自己統御能力に基づいた行為者・人格概念に対するフェミニズムや社会学からの批判的議論を学んできた。

本国の哲学・倫理学研究においては、人格概念に対するフェミニズムや社会学からの問題提起への包括的応答はまだ見られない。しかし、最近特に米国において、他者への「（相互）依存性」を人間の一般的条件として、人格概念を考え直す哲学・倫理学的議論はかなり増えてきている。とりわけ、マッキンタイヤーの「依存的な合理的動物」における人間の再定義、ヌスバウムの「相互依存性」に基づく正義論、キテイの「依存批判」など重要な哲学的議論は多く、またその内部では論争も存在する。こうした国際的な議論状況の把握と整理が求められている。

２．研究の目的

自立的（independent）主体の理念に基づく伝統的な人格概念は、障碍者や効果的な応答能力を失った高齢者に人格の身分を拒んできた。これに対して、本研究は、英語圏を中心に近年話題になり始めた「相互依存性（inter-dependency）」の哲学に基づいて、老いや病への脆弱さと、ケアに代表される他者依存性を本質条件とする新たな人格概念を構築することを目的とする。さらに、それによって、これまで理論的にも実践的にもコミュニティの周縁に位置づけられてきた人たちをコミュニティの成員として再包摂する哲学・倫理学理論を提起する。

３．研究の方法

平成２４年度は「相互依存性の哲学」の調査・研究を集中的に進める。まず、平成 24 年度前半に、「相互依存性の哲学」の理論的原理の抽出のため、主要文献と応答論文のサーベイ調査に着手する。平成 24 年度後半には、「相互依存性の哲学」の理論的背景の解明に移行する。相互依存性の哲学は、政治哲学的には、ロールズの「正義論」やシンガーらの「功利主義」との対決、アリストテレスの「共通善」の継承、「ケイパビリティ・アプローチ」「徳倫理」「コミュニタリアニズム」との近さと距離など、解明を要する理論的背景をもつ。

平成２５年度は「相互依存性の哲学」の臨床的裏付け作業を行うとともに「精神疾患の哲学」の調査・研究に従事する。平成 25 年度前半には、前年度の基礎研究からの展開として、障碍や病における相互依存性の具体層を臨床的に裏付ける作業に入る。それによって相互依存性の哲学の理論的言明の正確さを独自に精査する。平成 25 年度後半には、「相互依存性の哲学に基づく新たな人格論」を最新の議論状況の中で展開・提示するために、「精神疾患の哲学」のサーヴェイ調査に取りかかる。

平成２６年度は、これまでの研究で得られた知見を総合し、相互依存性の哲学に基づく新たな人格概念を最終的に構築する。

４．研究成果

(1) 平成二四年度は「相互依存性の哲学」の調査・研究を進めた。その研究・調査は、(I)主要文献と応答論文のサーヴェイ調査による 理論的原理の抽出、(II)その理論的背景の解明の二段階で進められた。

(I)ヤング、フレーザーらのフェミニストの論者における依存概念の議論と、キテイ、ヌスバウムらの病/障害の哲学 の研究に取り組んだ。彼女たちによる依存概念への注目は、自律性の理念に一面的に依拠した道徳理論、福祉政策論、政治思想の問題点を指摘し、他者への依存者や依存者へのケア提供者が社会的に孤立したり資源の分配において不利になったりしない政治体制の構想に結びついている。

(II)そこで、福祉や分配についての現代政治理論の研究に従事した。特に上記の論者が原則的に意見を共有する 功利主義批判の理解を深めるべく、ウィリアムズやロールズなど、代表的な功利主義批判者の著作に取り組んだ。

なお、 上記の議論を、研究代表者の従来の専門領域である現象学に関連づけることも試み、ハイデガーの「気づかい」の概念とケアの関係、また、フッサールやメルロ=ポンティの哲学を理論的基盤として最近盛んになってきたフェミニズム現象学と上記論者の政治哲学の関係を研究した。

平成二四年の本研究は、フェミニズム、病/障害の哲学、政治哲学、現象学といった多様な研究領域をケアや相互依存性の概念を軸にして取りまとめたが、このような成果は従来の研究には見られなかったものである。本研究の意義と重要性は、ケアや相互依存性の哲学という一つの理論的核を抽出したこと、この観点に基づいて大局的な視点を得たことにある。

研究の成果は、論文「死に至る存在としての人間---ハイデガーと ケア」の公刊や、スウェーデン・ウプサラ大学のジェンダー研究所における発表「"Body and Needs: Some perspectives on how phenomenology of female body may prove useful for feminist political activism"」に結実している。また、次年度以降の研究内容である「相互依存性の哲学の臨床的裏付け」や、病/障害の哲学における 「現象学的アプローチ」の研究も部分的に取り組むことができた。また、次年度以降の研究内

容である「相互依存性の哲学の臨床的裏付け」の研究も部分的に取り組むことができた。その成果は、論文「死に至る存在としての人間：ハイデガーとケア」の公刊や、スウェーデン・ウプサラ大学のジェンダー研究所における発表「"Body and Needs: Some perspectives on how phenomenology of female body may prove useful for feminist political activism"」に結実した。

(2) 平成二五年度は、計画通り、相互依存性の哲学の臨床的裏付けを進めることができた。平成二五年度は、（I）前年度の「相互依存性の哲学」の調査・研究の成果を臨床的に裏付ける作業と、（II）現在特に英語圏で盛んな障害や疾患の哲学のサーヴェイ調査を行った。
（I）については、国内の「当事者研究」と呼ばれる障害や疾患の当事者による自己研究に関する調査と、このテーマに関連する各種の催しや会議への参加および出版物のサーヴェイを通じて進めた。
（II）については、まずは生命倫理学における人格概念の批判的検討を進めた。シンガーおよびマクマハンといった功利主義者のパーソン概念に対して、認知障害をもつ子どもの親の立場から彼らを批判するキテイの議論を中心に研究した。障害と疾患の哲学については、Oxford University Press の「International perspectives in Philosophy and Psychiarty」シリーズの一部に取り組んだ。
　平成二四年度の本研究は、相互依存性やケアの概念を軸として、フェミニズム、病／障害の哲学、現象学、政治哲学を取りまとめることに特徴があった。平成二五年度の本研究は、これらの概念を深く考察するために、国内の当事者研究や家族の立場からの問題提起など、より現場に密着した研究や問題提起を取り込むことができた。
　その成果は、（I）国内の当事者研究に関する研究ものと、（II）現代の倫理学における人格疑念の扱いに関するものに大別される。
（I）(a) ヤングやフレイザーなどのフェミニズムの論者における依存概念を、統合失調症やアルコール依存症に関する日本の当事者研究における自立／依存論に接続する論文「"Body and Needs: Some perspectives on how phenomenology of female body may prove useful for feminist political activism"」を発表した。(b) 自立／依存の議論にとって重要な「家」の概念に焦点を絞って、ヤングにおける家に居ることの現象学や日本の障害自立運動における「家」の用法を接続して議論展開した論文「道徳的主体性と環境依存性」を発表した。(c) 論文「道徳的主体性と環境依存性」を掘り下げた内容をドイツ語訳し、2013 年 9 月 27 日にウィーン大学で口頭発表した（タイトル：Das Zuhause als übersehener Ort des Denkens: Eine feministische-phänomenologische Perspektive）。
（II）(a) 第七二回日本哲学会の公募ワークショップ「「理性をもつ動物」とは誰か？：「人格」概念への現象学的アプローチ」で、シンガーとマクマハンに対するキテイの批判をシェーラーやハイデガーといった古典現象学の概念装置を用いて解釈する発表を行った。(b) これに関連する内容を含む英文のコメンタリー論文が「Commentary: On crossing human and nonhuman: Human dignity reconsidered」が公刊された。その主な成果は、自立の基盤としての家（ホーム）に関して、米国のフェミニズムにおける議論と国内の障害者自立運動における「家」の用法を接続して議論展開した論文「道徳的主体性と環境依存性の問題」などに発表された。

(3) 最終年度となる平成二六年度は、これまでの研究の成果を取りまとめ、発信していく作業に従事した。
　相互依存性に基づく新たな人格概念の構築という課題にとって、これまでの研究から、その概念的作業は、特にフェミニズムと現象学の出会いによって可能になることが明確になってきたため、最終年度の研究は「フェミニズム現象学」の明確化と発信というかたちをとった。
　その成果としては、まず、独語論文「Das Zuhause als übersehener Ort des Denkens: Eine feministische-phänomenologische Perspektive」の公刊がある。
　また、日本現象学会におけるワークショップ「〈男女共同参画〉と現象学」において、フェミニズム現象学における人間観とその政治哲学的な可能性について報告した。さらに、フェミニズム現象学における国際的に知られた推進者であるサラ・ヘイナマー教授の来日講演時に大阪大学で開かれたオープン・セミナー「フェミニズム現象学」において「The Personal is phenomenological is political: The case of DARC women's house」と題した発表を行った。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① Takashi IKEDA, Das Zuhause als übersehener Ort des Denkens: Eine feministische-phänomenologische Perspektive, in *Polylog-Zeitschrift für interkulturelles Philosophieren*, 査読有、No. 31, 2014, pp. 15-22.
② Takashi IKEDA, Body and Needs: Perspectives on how the phenomenology of the female body may prove useful for feminist political activism, 『臨床哲学』、査読有、Vol. 15, No.2, 2014, pp. 57-73.
③ 池田喬、「死に至る存在としての人間：ハイデガーとケア」、『明治大学教養論集』、査

読無、Vol. 493, 2013, pp. 145-167.

〔学会発表〕（計 5 件）
① 池田喬 他、ワークショップ「〈男女共同参画〉と現象学」、第 36 回日本現象学会大会、東洋大学、2014 年 11 月 30 日
② Takashi IKEDA, "Das Zuhause als übersehener Ort des Denkens: Eine feministische-phänomenologische Perspektive zum Thema," Tagung "Ort/e des Denkens. Place/s of Thinking" (Universität Wien, Österreich) 2013 年 9 月 27 日
③ 池田喬 他、ワークショップ「「理性をもつ動物」とは誰か：「人格」概念への現象学的アプローチ」、第 72 回日本哲学会（お茶の水大学）、2013 年 5 月 12 日
④ Takashi IKEDA, "Body and Needs: Some perspectives on how phenomenology of female body may prove useful for feminist political activism," Symposium "Feminist Technoscience and Theory of the Body: Cases from Japan, Sweden and [elsewhere]" (Uppsala University, Sweden) 2013 年 3 月 12 日
⑤ 池田喬 他、ワークショップ「フェミニズム現象学の現状と展開」、応用哲学会第４回年次大会（千葉大学）、2012 年 4 月 28 日

〔図書〕（計 4 件）
① Takashi, IKEDA etc, Commentary: On crossing human and nonhuman: Human dignity reconsidered, Oxford University Press, in *The Future of Bioethics: International Dialogues*,2014, pp. 371-376.
② 池田喬 他、「道徳的主体性と環境依存性の問題」、御茶の水書房、『倫理のおける主体の問題』、2013、pp．207-228．
③ 池田喬 他、「研究とは何か、当事者とは誰か：当事者研究と現象学」、医学書院、『当事者研究の研究』、2013、pp．113-148．
④ 池田喬 他、「責めの存在論的・現象学的研究による道徳的懐疑の克服」、弘前大学出版会、『生きることに責任はあるのか：現象学的倫理学への試み』、2012，pp．57-82．

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
池田喬（IKEDA，Takashi）
明治大学・文学部・専任講師

研究者番号：70588839

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：